

2010年度5月度の総括

すべての「進学塾ビッグバン」に集う人々へ

だが、その年のベストセラーにもなっていた「共同幻想論」を糸井は、ひどく新鮮な思いで読んだ。糸井自身の言葉で言えば、妙に「うれしい感じがした」のである。「遠野物語」から始まって、「そう来たかあ」って。結構、子どもなりに、太刀筋が見えないっていうか、すごく愉快だった。不思議な本ですよ。政治の話するわけじゃなくて、急に伝説を語り始めたわけでしょ。人は共同幻想と、対幻想と、個人幻想があって、っていう、考える基盤の原則を始めたわけですよ。うれしい感じがしたんですよ。わかってないのに。わかったつもりになりたくてなりたくて、仕様がなくて、わかった顔してましたね。わかってないんですけどね、もちろん。

「共同幻想論」に書かれている3つの幻想は、全然違うものだから、一緒にできないよ、ってことは、一冊読んでわかったんです。わからないなりに。その目で生きようになるじゃないですか。いちおう。そっかーって。あ、ごっちゃにしてたんだと思うと、結構、いろんなものが違う見方になるんですよ。

自転車手に入れた子どもみたいなものですよ。自転車の構造なんかわかっていないですよ。遠心力がどうとか、なぜ倒れないとか。でも、そのチャリで、隣町まで行けるようになる。吉本さんの話って、いつもそうなんです。愉快になるんですよ。

藤生京子「吉本隆明のDNA 糸井重里『態度への共感』」朝日新聞出版

ここでいう「その年」とは、1968年のこと。学生運動が最も激しかったころです。有名なコピーライターで、今40人の従業員を抱える会社の経営者である糸井重里は、1948年生まれ。いわゆる団塊の世代です。

この世代の人たちが学生運動に疲れ果て、何とかうまく引き際をきれいにしたいと考えてその論拠となる言葉を語ってくれる「思想家」が吉本隆明でした。私は、その後の世代で、学生運動が急速に退潮していったころに大学に入学しました。キャンパスのあちこちに派手なタテ看だけが、学生運動のすさまじさをわずかに残していました。運動の渦中ではなく、周辺にいた先輩から勧められたのが、やはり吉本隆明でした。勧めた先輩の多くはすでに無事学生運動から足を洗い、まともな就職活動に励み始めていました。いまだに学生運動を続けている先輩は、むしろ吉本を軽蔑し、「あれは最低の奴だ」と罵ってさえいました。彼らは、ストイックに「左翼」の牙城を守っているかに見える埴谷雄高は許せるらしく、「さん」づけで呼ぶことによって、埴谷さん、吉本、という呼び方で差別化していました。

埴谷雄高には、「死霊（しれいと読む）」という未完の小説がありますが、この極めつけの観念小説も含めて、埴谷の書くものは、エッセイ風、所感風で、悪く言えば、繰り言を

並べるだけ、文体には独特の魅力はあるけれど、出口を見せてくれるものではない、という弱みを持っていました。これに引き比べ、吉本は、糸井重里も一知半解的に読んだという「共同幻想論」をはじめ、「言語にとって美とは何か」「心的現象論」と、いわゆる吉本3部作と言われる原理的書物を編んでいました。左翼革命を目指していた当時の若い世代に、革命とは縁もゆかりもなさそうな国家論、言語論、心理学の原理を、学者ではなく、理科系出身の文学者（吉本は東工大化学科出身）によって書かれることの新鮮な驚きとも相まって、まず目指すもの、出口が明確であるという理科系らしい強みを持った作品に触れることの、ある種達成感に近い解放感をもたらしてくれました。

糸井はうまいこと言っています。「自転車手に入れた子どものようだ」と。

私も、思い返せば、今まで達成感と手に入れた感を感じた最たるものは、自転車を買ってもらって、これに乗れるようになった時ではないか、と思います。自分の足で漕いで行ける距離が急に縮まり、自由というものが、顔を吹きなぶっていく風のイメージでとらえられた瞬間だったと思えるのです。その後おとなになり、車を買ったり、家を買ったりしたときも、この心躍る「自由」の感覚ではなかったような気がします。

吉本隆明の書物の爽快感は、その文体もさることながら、原理に立ち返ることを旨とするため、出口、到達点を予感させてくれる所にあったと思います。

「共同幻想論」は、タイトルのカッコ良さに加え、国家は、幻想にすぎず、何ら恐れるものでも尊敬するものでもないとする、高みから睥睨する優越感を読後に与える、刺激的な書物でした。

学生運動を経験した人ならまずぶち当たる青の戦闘服と銀色のジュラルミン盾を持った機動隊が、どうにも越えられない壁と思われ、それこそ国家権力の暴力装置だよ、と教えられ、確かにそう思い、あれを何とか突破しないとという思いにとらわれたひ弱な大学生たちが、一冊の書物であっさり「超えた」と思える瞬間を保証してもらえたとしたら、それこそ「読書」が革命的営みなのだ、という甘やかな幻想を抱いたのもゆえなしとしないでしょう。

吉本隆明の書物は、また、ほどよく難解なのです。一方で、「とかんがえる」とか「じぶんは」といった、どうでもいいところに「ひらがな」を用いて、入り口なのか、ほころびなのかわからない個所をおそらく意図的に設けている戦略もあって、なかなかの「深み」を感じさせてくれるのです。

けれど、吉本に惑溺するうち、これが実は、目指していた「革命」の戦略とは程遠い内容であることにやがて気づくのですが、そのころには、「革命」なんてものを日本で実現することなんかできやしない、また、左翼革命を実現した国であるソ連や、中国、キューバも結構大変らしいということも伝わってきているので、いつのまにか、机上の革命ごっこぐらいで、青春のあり余る情熱を慰藉し、処理することでとどめておこう、という気になるのです。その「逃げ」の時の格好の書物が「吉本隆明」なのです。昼間は就職活動をし、あるいは、実際に就職が決まり、決まった時間に会社に出勤し、決まった給料をもらう生

活に慣れ始め、しんどいと思いつつも、就職もしないでいまだに「革命」運動を続けているかつての仲間の一部に、ちょっと悪いと思いつつも、一方でいつまでやっとなん、とやや見下すこともできるようになっても、俺はすでに吉本隆明を読んで世界をつかんだからいいんだ、と思い、今度は、同じサラリーマン仲間でも、俺はお前ら凡人と違って吉本隆明を読んですでに世界をつかんできたんだ、というこれまたひそかな優越感を覚える、というためにも「吉本隆明」はあったのです。まるでヤクザのバシリをしているアタマもケンカも弱いチンピラが、俺は 組の若頭を知っているぜ、と言って、「若頭」がいったい何を意味するのかわからない素人を脅すようなものでした。

80年代に入って学生運動もすっかり衰え、かつての活動家の若者も家庭を持ち、子をもつ社会の中堅を担うようになったのちも、吉本隆明が、なぜ魅力的であり続けたのか、それは、社会の愚かな熱狂に、冷めた逆説的な解釈を与え続けたからでしょう。たとえば82年に起こったヨーロッパの核兵器反対の波に共鳴する形で発表された「核戦争の危機を訴える文学者の声明」を真っ向から批判し、アメリカの核ばかりでなく、ソ連の対アジア限定核戦争用のミサイル配置をも批判すべきだとし、「反核運動の本質がどう成立できるのかは、すでにはっきりしている。現在、世界で核戦争をやる可能性と能力を持った米ソ両国へのはっきりとした抗議運動としてしか成り立ちようがないのだ。そうでない文学者の反核声明など特定の党派的なものにすぎず、戦後運動史の中で、理念も現実形態も最低のもので、粉碎してしかるべきものだ」(「反核」異論)と述べています。

そう言えば70年代、公害問題がたけなわの頃も、吉本は、「反対運動をグダグダ唱えて、責任者をつるしあげる運動にかまけるより、公害が出ない仕組みを科学技術的に追求するあるいはさせる方を選ぶべき」という、理科系らしい、合理主義的な逆説を吐いて、私たちを驚かせたりしました。

考えてみればその方が真理です。ところが、若いうちは「何でもより強いものに逆らいたい、できたらトップをつるしあげることができたら気持ちいいだろうな」という心性をもって「反対運動をしかける 苦勞してトップを糾弾するに至る トップに謝罪さす 補償を取り付ける」という仕組みで、「勝利を勝ち取った」とすることに生きがいを感じることを優先させ、吉本の言う合理的判断を退ける傾向にあるものです。わざわざ誰かを敵に仕立て上げなくても、合理的に「世の中を良くする」ことさえ実現すればいいのだ、という一点をいつの間にか忘れてしまうのです。

けれども、「吉本隆明」を経ないで相変わらず「正義の言論」を吐く連中が後を絶たないのは困ったものです。香港人の中でも美的には相当下位レベルでありながらかつて一人前にアイドルぶって甲高い声を出して歌を歌い、私たち当時の若者に迷惑をかけまくっていたアグネスチャンが、静かに消えていくことも、おとなしい婆さんになることもなく、何かのツテを頼ったのか、ブラウン管に再登場するや、「子どもの人権」を訴える「正義の有識者」になって「日本」を叱咤、批判しているのを見ると、ちょっと待て、まず人権のな

い国の出身者に言われたくないわ、と言いたくなるほどです。「子どもの人権」は誰が見ても普遍的な「正義」です。「反核・平和」も「公害反対」も誰が見ても普遍的な「正義」です。しかし、それを、声高に訴えることがいかに「羞恥心」のなさを物語っているか、ここに気づかない連中とは、おそらく永遠に「友人」にはなれない気がします。

ビッグバンの小論文科のお二人の先生は、そのあたりをよく理解しています。大学側が求める「正義の結論」をどのように生徒にまとめさすかを熟知していながら、他方でその「正義」なるもののうざったさ、偽善性をも熟知しておられます。生徒は、書くべきひな型を学びつつ、その背後にあるアグネスチャンレベルの偽善性に気づき、それを言葉にする力を学びながらも、しかし実際の答案には書かない「余裕」を持ちます。すると、不思議なもので、小論文の答案に、不思議な「厚み」「オーラ」が加わります。答案は、確かに通り一遍の「正義」を語っていながら、アグネスチャンのようなばかばかしい正義とはどこか違う、説得力に満ちた「厚み」のあるものになっているのです。

私は全生徒の英語の答案を毎週添削していますが、矢原、芝両先生の指導のもとに書いてくれた生徒の小論文を見せてもらうのが好きです。生徒たちが、本当に豊かな情理わきまえたスケールの大きな受験生、若者へと旅立っていくのがわかるからです。20歳前後の日本の若者の可能性を見いだせるからです。

立派な家柄、高学歴、あり余る資産を持つ鳩山由紀夫首相が、日本の国益より、党利党略、私利私欲の固まりの小沢一郎に頭が上がらない不思議な国は、今、一触即発の朝鮮半島を間近に控え、さて、どうこの状況をやり過ごすべきか、思案のしどころ状況です。

アグネスチャンや「一位でなくても二位ではだめなんですか」などと能天気なことを言う、ついこの前まで日本人でさえなかった蓮舂議員らが私たちの言論や思考の自由を司り始めています。

私たちの思考の自由を奪うものは、決して獐猛な顔つきをしていない、むしろ、優しく、女性的、あるいは凜とした、あっぱれな女性そのものであることを、忘れてはなりません。悪人は、白い優しい手をしている

金正日のように、見るからに悪党面をし、実際にも悪党であるという例はむしろ稀です。

ビッグバンの小論文の授業は、金正日の悪を悪として見抜く安易な営みを偏差値40とすれば、アグネスチャンや蓮舂の偽善を見抜く偏差値70の力をすでに5月の時点で身につけさせるところまで来ています。

ときどき、両先生の授業からは、大爆笑が漏れ聞こえますが、私たちは、その瞬間に生徒の偏差値の針が70を越したことを確認しています。先日もある生徒のお父様が、授業見学に来られ、矢原先生の授業を受けて、いたく感銘を受けて帰られました。わが子の弱々しい心に、先生の「強くしなやかな」魂を吹き込むことができる幸せに感謝の言葉を残しておられました。

まさしく、ビッグバンの講師の訾咳に触れた者に、あらゆる意味での「敗北」はありま

せん。

昨年は、時ならぬインフルエンザが日本列島を覆い、道行く人は皆マスク姿で、多くの学校は閉鎖に追い込まれました。わが進学塾ビッグバンは、世間の一切の警告を無視して、保護者の方々の了解のもと、授業を継続しました。結果オーライで言うのもなんですが、ビッグバンからは重篤の患者は一人も出ず、ほとんどの生徒もしっかりと出席し、最終的には、医学部医学科 64%という高い合格率を出すことができました。その間、ビッグバンの生徒は、「今、他の予備校、学校では皆自宅待機の状態だ。彼らが家で学校に行っているだけの効率をもって勉強しているわけではない。この時点で自分たちが勝っている。」と思ったそうです。そうした優越感は、寄る辺ない浪人の身にはことに必要なものです。長らくゆとり教育で「競争」とか「優越感」はいけないものだ、と教えられてきた世代でしたが、ここへ来て、「競争」や「優越感」の必要性と心地よさを感じたのでした。

今年は幸か不幸か、インフルエンザのような、優越感を只で得る事態には遭遇していませんが、一日 640 分フルに勉強させられる体制は、言わずと知れた、日本一の勉強量です。これをやり遂げつつある、という優越感はビッグバンの生徒に通底するものであることに間違いありません。

5月のゴールデンウィークというものもビッグバンにはなく、第一日曜日に球技大会+食事会があり、第二日曜日からは模試と保護者会が立て続けに連なり、生徒はほとんど休みがありませんでした。とはいえ、5月中旬の「代表に食事をおごらせよう会」では一人の例外もなく立派な健啖ぶりを示してくれ（朝体調不良を理由に休んでいたある生徒はきっちり夕食時には「和幸」に現れて、誰よりも高級和牛を注文していました）頼もしい限りでした。この1ヶ月間、休みなし、ぶっ通しという体験は、来年1月中旬から3月中旬までの長丁場の予行演習として必ず有意義に機能するものとなります。むしろ私は、怖いのはその反動が来る6月とみています。季節柄、体がしんどくなるのと相まって、朝起きれない、一日持たない、などの状況が起こりがちです。

これまでも増して徹底的に管理していきますので、覚悟をしておいてください。どんなにたつらくても、朝ご飯を食べる、授業だけはきちんと出る、10時まで自習室で缶詰めになる、これだけは励行させます。守ってください。6月には推薦、AO入試の概要が出そろいます。合わせて注意しておいてください。

平成 22 年 5 月末日

進学塾ビッグバン 松原好之（文責）